

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

80

元旦に遠く望む景色が
ある。黒岩の稜線を見せ
てゆったりと横たわる五
葉山である。今年は朝日
を浴びて銀色に輝いてい
た。

初めて五葉山に登った
のは二十代に入ってから
である。黒岩コースをた
どったあの時の情景が今
も鮮明に蘇ってくる。早
朝深い霧の中を四、五人
で歩く。初めてみる五葉
山麓に驚いた。

岩の上にドッシリと根
を張ったヒノキアスナロ
は、森の暗さの中にも暖
かさを感じさせる。稜線
に出、緩やかな小径をま
っすく進むとすうりとし
た白い肌の木が天を突く
ように群れをなして立っ
ている。ダテカンバの林

であった。
やがて斜面にコケに覆
われた大きな石が点在
し、窪地から水が湧き出
ている「水飲み場」に着
いた。仰向けになって休
んでいると木々の間から
青空が覗いた。森に抱か
れていると自然の営みの
不思議さを美感する。
曇のような大きな岩が
重なり合い山をつくりだ
しているような黒岩。ぱ
っくりと口を開けた隙間
は暗く、底が見えない個
所もあった。緊張と怖さ
が慎重な登山を促し、や
っと稜線に出ることがで
きた。

眺望が一気に広がり、
前方には牛の背のような
尾根筋が伸びている。五
葉山の頂上部であった。

ニフツセイ

すこい見晴らした。登山
に出している。

親戚の叔父は八十歳近
くで初めての登山であ
る。「俺も連れて行って
くれ。この年になっても
五葉山に登ったことがな
いのかと、人に笑われた
くないから」。叔父は農

の丘陵地に広がるシャク
ナゲの群落、頂上部のコ
ケモモ、原生林のハエマ
ツ。どこまでも広がる日

の出岩からの眺め。「ヤ
ッホー、ヤッホー」と思
わず叫んだ。

初めての登山から四十
年が経とうとしている
が、一緒に登山をした人
たちとのことを忘れるこ
とはない。母は七十歳を
過ぎて登山した。決して
薬ではなかったはずだ。
それだけに胸に刻まれた
達成感や充足感は格別の
ものだったろう。母は、
八十八歳になるが畑仕事
をし、とれた野菜は市場

の疲れが一気に消えた。
私を魅了したのはこれ
らにとどまらない。稜線
の丘陵地に広がるシャク
ナゲの群落、頂上部のコ
ケモモ、原生林のハエマ
ツ。どこまでも広がる日

の出岩からの眺め。「ヤ
ッホー、ヤッホー」と思
わず叫んだ。

初めての登山から四十
年が経とうとしている
が、一緒に登山をした人
たちとのことを忘れるこ
とはない。母は七十歳を
過ぎて登山した。決して
薬ではなかったはずだ。
それだけに胸に刻まれた
達成感や充足感は格別の
ものだったろう。母は、
八十八歳になるが畑仕事
をし、とれた野菜は市場

元旦に見る五葉山

住田町上有住 柏崎 サツ子

の方々とも登山できた。
私の子どもたちも日焼け
して登山から帰ってきた
が、今は住田を離れて遠
くで暮らしている。きつ
と折に触れ五葉山登山の
ことを思い出しているに
違いない。

私は六月の新緑の季節
には夫や友人たちと赤坂
峠から黒石まで出かけ
る。生き生きとした木々

の葉、さわやかな風、包
み込む森のにおい、そし
て誇らしげに咲くツツジ
に出会うためである。

そのひとときが嬉し
く、楽しい。自分がすっ
かり自然の一員として受
け入れているように思う
からだ。身も心も自然に
預け、ゆっくりと歩く。
ここには、すべてを忘れ
させてくれる奥深さがあ
る。

「とてもきれいだった
よ」「もう少しだから頑

張ってね」と声をかけて
くれる人たちがいる。豊
かな森は、人を素直にさ
せ、思いをそのままに伝
えさせる。

今、私たちは変化のめ
まぐるしい、価値観の定
まりにくい時代に生きて
いる。一人ひとりの存在
が見えにくく、感じにく
いままに生きていくこと
へのむなしさや寂しさを
感じながら、森に招か
れ、包まれていると、日
常生活で忘れられている
ことやないがしるにされ
ていることを気づかせて
くれる。

「一人ひとりの存在を
大切にし、人々のつなが
りを大事にしていきなご
い」。遠くから五葉山
は教えてくれているよう
に思う。元旦、五葉山を
介し自分を顧みている。

【執筆者プロフィール】
一九四四年生まれ。
住田町上有住在住。主
婦。ワサビ栽培に意を注
ぐ。



下有住十文字から雪をいただいた五葉山(写真中央奥)を望む